

## 献辞

稚内北星学園短期大学学長  
丸山不二夫

木村謙二先生は、明治の最後の年、明治45年に北海道でお生まれになりました。昭和7年に、北海道札幌師範学校を卒業し、深川で小学校教師になった先生は、敬虔なキリスト者として、天皇礼拝を拒んで、特高警察の尾行をつけられ、昭和12年、ついには職を辞することになりました。同年、上京し、代用教員・青年学校指導員を勤めながら法政大学に学び、昭和18年には、法文学部文政学科（心理学専攻）を卒業されました。その後、月刊「教育」の編集助手、道立教育研究所を経て、昭和26年、北海道大学教育学部助教授になられました。昭和37年には、北海道教育大札幌分校教授となり、翌37年には、教育大学付属小中学校の校長を併任されました。先生の業績は広いものですが、何よりも注目すべきことは、先生が、当時、教育の場で顧みられることのなかった、学習遅滞や知的障害をもつ子供たちに、終始一貫した暖かいまなざしを注いだことです。障害児教育は、戦前からの歴史を持つのですが、先生は、この分野で日本の先駆者の一人です。昭和48年、先生は、請われて札幌の北星学園女子短期大学の学長に就任され、以後、昭和60年まで、三期12年にわたってその職務を全うされました。

先生の後半生の大きな転機は、昭和59年に訪れます。当時、稚内市は、浜森辰雄市長（現本学園理事長）を先頭に、市民の幅広い支持と共感のもとに大学誘致の運動を展開していました。一方、北星学園の时任正夫理事長（前本学園理事長。故人）は、北星学園創立100周年の節目を、意義ある取り組みで飾りたいと考えておりました。稚内市と北星学園との出会いによって、稚内北星学園の設立が目指されることとなったのですが、責任者の白羽の矢が木村先生に立てられたのです。昭和59年、稚内北星学園設立準備委員会が作られ、先生は、新しい大学の学長候補として準備室長に就任されます。この時、先生は71歳でした。それから、開学までの3年間、学科を構想し定員を割りつけ、カリキュラムを設定し教員を集める、こうした作業を、一方では、文部省との交渉を繰り返しながら、少ないスタッフでやらなければいけなかったのです。昭和62年、様々な困難と格闘しながら、稚内北星学園短期大学は開学しました。

先生のご苦勞はまだ続きます。開学当初の本学は、大幅な定員割れに悩まされます。こうした困難な時期にも、先生は、穏やかで柔らかな笑顔を絶やさず、しかも、信念に裏打ちされたしっかりとした姿勢を崩しませんでした。稚内での短大経営は決して楽なものではありませんで

したが、教育内容と施設の充実を中心とし、地域に根ざそうとした、木村学長の三期 12 年の努力は、ようやく実を結びつつあります。稚内北星学園は、「最北端は最先端」のコピーとともに全国の評価と地域の支援を得て、四大への道を歩みだそうとしています。稚内に短大を作ったこと、それが四大への発展する礎を築いたこと、この二つは、木村先生の大きな功績です。これからもお元気で過ごされますことを願って、献辞としたいと思います。